「翻訳すなわち創造」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩野, 卓司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20204

【野崎歓　特別講義】

「翻訳すなわち創造」

岩野　卓司

二〇一八年十一月十日に行われたミニ・シンポジウム「翻訳と文化」（教養デザイン研究科主催）では、野崎歓氏は「翻訳すなわち創造」というタイトルで発表をした。野崎氏はフランス文学の研究をする傍ら、映画や日本文学についての評論活動、エッセイの執筆などで活躍しており、サントリー学芸賞をはじめ多くの賞を受賞している。また、フランス文学についての多数の翻訳を出版しており、この経験に基づいていくつもの翻訳論を書いてもいる。その意味で、今回のシンポジウムには最適の人と言えるだろう。

野崎氏のタイトル「翻訳すなわち創造」は、大変大胆な問題提起である。私たちの先入観においては、翻訳は原文を違う言語で置き換えただけのものであり、セカンドハンドのものに過ぎないと考えられがちである。これは独創性は訳される原文のほうにあり、翻訳は単にそれを移し替えただけのものだという発想である。発表で取り上げられたモンテスキュー『ペルシア人の手紙』の「翻訳否定論」は、こういった先入観を代弁している。だから、野崎氏のように、翻訳が創造であると主張することは、従来の翻訳の概念と創造の概念に変更を迫るものなのではないのだろうか。

私たちの先入観を切り崩していくために、野崎氏は作家が創作をする際に翻訳の影響を受けている例をいくつも挙げている。ガスカール『死者の時』（渡辺一夫他訳）

の表現が大江健三郎『死者の奢り』の描写に生かされているという事実や、中村文則『銃』が実はカミュ『異邦人』（窪田啓作訳）の冒頭を念頭におきながら執筆されていた事実などが、説得的に説明されていく。谷崎潤一郎も若いころボードレールなどの翻訳が創作に大きな影響を与えているそうである。また、井伏鱒二「さざ波軍記」も、平家の一族の一人が書き残したものを現代語に訳したという形をとり、翻訳が作家の着想の原点になっている。架空の翻訳が文学創造となっているのだ。（谷崎や井伏についての詳細は、野崎氏の好著『谷崎潤一郎と異国の言語』と『水の匂いがするようだ　井伏鱒二のほうへ』をぜひ参照してもらいたい。）このようにいくつもの文学作品が証しているように、翻訳は作家の創造と密接に関係している。

さらに野崎氏の発表は、翻訳自体の創造性についても論及している。アベ・プレヴォ『マノン・レスコー』の三つの翻訳（河盛好蔵訳、青柳瑞穂訳、野崎歓訳）を比較しながら、それぞれが独自のイメージや世界を繰り広げていることを示して、私たちが同じ文学作品に接しても翻訳を通していかに違うものを感じ取るかについて語ってくれた。ここに翻訳がもつ創造的な面があると言えるのではないのだろうか。こういった創造性があるから、文学作品は翻訳を通して広がりを持ち、豊かになるのだ。

批評や研究が文学作品を解釈することによってその隠れた面を明るみにだすように、翻訳も作品の新しい面を発見させる。ここに翻訳による創造があるだろう。私たちはふつう創造の理想として「無からの創造」を考えがちである。これは、何の影響も受けないし何の模倣もない創造であり、神にのみ許された特権である。それに対し現実の創造は、材料においても形式においてもそれ以前のものと深くかかわっている。文学創造も純粋な創造ではなく、何らかの形で他の作品の影響を受けており、広い意味で「翻訳」なのである。翻訳のほうも、発見があるという意味で「創造」でもある。私たちは「翻訳としての創造」や「創造としての翻訳」を考えるべき時期にきているのではないだろうか。そう考えると、私たちは翻訳の概念や創造の概念に関して意味の内実を変えていく必要があるのではないだろうか。

近年、翻訳論が流行し、翻訳をモデルにして文化について語られ始めている。そこにはいくつもの理由が考えられるが、そのうちのひとつとして、作品を違う言語で

再現することに多くの人が未知のものの創造的な発見をみいだしていることが挙げられる。またこの事実は裏返しの形で、文学の創作のみならず、翻訳、批評、研究、さらにはあらゆる文化的な活動それ自体が、広い意味での翻訳に他ならないことを告げている。それらは純粋な創造でも純粋な行為でもないからである。

豊富な実例を挙げながら野崎氏が指摘した、翻訳と創造の連続性の問題は、まさに現代の文化の根幹にかかわっている。だから、私たちひとりひとりがそれぞれのやり方で考えていかなければならない問題であろう。